マイ　マイセルフ　－僕のマイセルフ－

和田　K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マイ　マイセルフ　―僕のマイセルフ―

【Ｎコード】
Ｎ５４０５Ｔ

【作者名】
和田　Ｋ

【あらすじ】
マイセルフと呼ばれるモノがあった。そのマイセルフを使いながら、ともに成長していく主人公の物語。
近未来的ガンアクション）＾ｏ＾（
読んで貰えればうれしいです（＃＾・＾＃）

植木　仁（前書き）

基本はガンアクション系な話です。基本的にはカオスな感じになっています。フィクションです。なんとなくでも読んで貰えたらうれしいです。

植木　仁

朝から、・・・正確にはそうじゃない。起きた瞬間から僕の任務が始まる。僕の名前は佐藤隆起（さとうりゅうき）。警察官になろうと試験を受けたら、運良くなれた。そこまではよかった。僕は頭はそこそこだったけど、運動神経で警察官になれたんだ。ゲームで鍛えた反射神経も役に立った。

警察官になってから、もう3か月経っていた。警察官になりたての頃、僕に、上官が言ってきた。

「お前、名前はなんていう？」

上官の名前は植木仁（うえきひとし）。はっきり、隆起のことを馬鹿にしていた。自分が試験管だったら絶対に落していたと、今でも思っている。隆起を見る目は見下しと冷笑が込められているも、隆起にはそんなこと気づきもしなかった。

「佐藤隆起と申します。よろしくお願いします」

植木は馬鹿にされてもなお、礼儀正しく接しようとする隆起に内心、更なる見下しをしたが、そんなことは微塵も表情には出さなかった。少しだけ舌打ちするように左頬に憎らしい笑みが走る。傍から見ればムカつくほど隠しきれていなかったが、気が付いた隆起にはなんか笑ったようにしか思わなかった。

「佐藤（名前は本当は知っていた。話のきっかけがなくて聞いただけ）、お前に命令が出たぞ」

命令と言ってもそんな大袈裟なものではなく、基本的には個人の意思が尊重される。だが、未だかつて、それを断った者も断る勇気がある者もいなかったので、植木はめんどくさく『命令』の一言でまとめていた。

基本、植木は新人を馬鹿にしている。新人だけではない。誰に対しても馬鹿にした態度をとっている。気づいていないようだが、植木こそみんなに馬鹿にされていた。隆起以外には、隆起は誰も馬鹿

にしない。する必要がないからだ。
「はい？」
隆起はその『命令』がなんなのか、植木の口から出るまで待った。植木はもったいぶってなかなか言い出さない。隆起の困惑した顔を見ようとしているのだ。隆起はいつまでもまじめな顔で聞いている。逆にそれが植木のプライドを傷つけた。暴力こそ使わないが（そんなことで使われても困るが）口調が荒々しくなっていた。隆起は真剣に聞いている。
「お前には、特殊警察課になれとの命令が出ている。今から速やかに特殊警察課に出向き、そうそうと挨拶して来い」
植木はビシッと、特殊警察課のほうを指差した。指差した方向にはトイレしかない。隆起はどういう意図があるんだろう？と思いつつも、とにかく大きな声で返事をした。
「はい！！！」
すぐに向かおうと思ったが、一つ気になることがあったので植木に質問してみた。指差す方角のことも当然気になったが、そのことは聞かないでおくことにした。なんか、その質問をしたら怒られそうな感じがあったからだ。
「植木上官。・・・あの、特殊警察課って、何をするんですか？」
植木はもうすでに、自分の中で自分の役割を終えている。隆起に『命令』を伝えればそれでいいのだ。それ以上の会話はめんどくさいだけ。植木がさほど、誰からも信頼されてないのはそこだ。一応、肩書だけあげて、適当に使われているのが植木だ。植木は答える。
「とにかく行けば分かることだ。早く行ってきてくれ」
植木の仕事は主に伝言板。なので、役職の割には給料がずば抜けて低い。でも、そんなことは植木本人は知らない。植木には、給料を相談、ましてや比べるような友人などいない。それに、植木は当然ながら結婚もしていないし、両親とともに暮らしているので家賃もかからない。いくらでも理由をつければ、適当に給料も安くできた。出来たから、やめさせることもなく、まだ警察官なのだ。

隆起が二度目の大きな返事、「はい！！！」と答えると、指差した方向とは逆の方向へ走っていった。すぐに見えなくなると、植木もそそくさと、自分の持ち場に戻っていく。指差した方向には、特に意味はなかったらしい。植木の持ち場は主に、受付か駐車場の管理（草むしり等）。毎日休まずに、まじめにこなすのが唯一褒められる点だ。

隆起はすぐに、特殊警察課に着いた。話のみで聞いたことこそあったが、実状は知らなかった。ほとんど誰も知らないが。そこは、一見するとただの会議室のような場所で、同じ警察官であっても特に誰も気にせず、中を敢えて覗く者はいない（気にはするものの、覗いてはいけない雰囲気が漂っている）。少し間をおいて、コンコン。と、ノックをしてみた。何も返事が返ってこないので、勝手に入ってみた。

「失礼します」

ノブを回し、木の扉を開ける。そこは、部屋の真ん中に椅子が3つだけ並んだ殺風景な部屋かと思いきや、扉の真ん前に横長の机があり、そこに3人の男が座っていた。3人が3人とも、ひどく冷厳な面持ちをしている。そのうちの1人が言った。

「佐藤隆起君だね？そこの椅子に座りなさい」

隆起は言われるがままに取り敢えず椅子に座った。どこに座ろうか迷ったが、ほかにも来そうだから端っこに座った。座るとすぐ、3人が3人ともにっこりと笑った。そのあまりの変わりように、隆起は一瞬怯えた。なんか嫌な雰囲気だ。そう思った。その予感はある意味、正しく、ある意味間違っていた。

「ここは何をするところなのですか？」

隆起の質問に、3人の笑顔が壊れ、ため息に変わる。特殊警察課のことは、基本的には誰も知らない。ここの課に来れる人間は限られているし、初めの選考に落されれば、ほぼ、今後声をかけられることはなかった。なので、警察の試験を受けても、警察のホームページなどでも各メディアなどでもその存在を公表していない。隆起

が知らなくても当然のことなのだ。
３人がため息をついた訳は、植木に対してだ。植木はそう言ったシークレットに関して、口が堅かった。だからそういう伝言なども、ほか役に立たない植木に任せるのだ（ほかにも度々、そのような内密なことを植木に頼んで伝えさせている）。ただ、気が付いてきたことは、植木は口が堅いのではなく、単に言うのがめんどくさいだけなのだ。
「だからあいつは・・・」
と、３人のうち、誰かがそう言った。もしかしたら、それを言った者が初めに言っただけで、タイミングが違えば全員でハモっていたのかもしれない。
「それでは、まずそこから説明しよう」
説明し始めたのは、３人のうち、真ん中に座っている高田伸晃（たかだのぶてる）。植木に対して苦言を言ったのも高田だ。高田は、目の前の机に置いてある書類を、意味もなく両端をトンットンッ揃え、「ぅんっ」と軽く喉を調整してから説明し始めた。
特殊警察課とは・・・マイセルフと呼ばれる機械を使い、普通の警察官が鎮圧できない事件の時に呼ばれ、それを収めるのが役目。なので、それ以外の業務は主に訓練である。基本的には射撃・体術・語学・体力作りに励んでいる（語学はあまり使わないが如何せん暇なのでネイティブのように話せるまでに教える。余談だが、隆起の先輩たちは多くて１０か国ほどしゃべれるようになった。もちろんネイティブで）。
特殊警察課に配属されると、各人、初めにマイセルフという機械を支給される。そのマイセルフを使いこなせるようになることが、初めの任務というか職務というか・・・になる。
マイセルフとは、特殊警察課に配属された者々が自分の、自分に合った相棒を育てるためのマシーン。機械。ロボット。呼び名はなんでもいいが、とにかくここではマイセルフと呼ばれている（勝手に呼びやすい名前でみんな読んでいる。マイセルフは名称）。自身

の思考、考え、行動、心理、精神、いろいろな要素を覚えさせ、共感させ、自分が動いたときに一番してほしいことをオートでさせるためのものだ。
　フォルムは、ほとんど人間と変わらない。背丈は初めに選べる。ほとんどのものが自分に似せる（その方が感情移入しやすいのが一番の理由だ）。たまに、デカかったり小さかったりする者もいるが、それも有りだ。本人に背丈がある場合などは、マイセルフは小さいほうができないことを補えたりするからだ。要は、どこに重点を置くかでその背丈が決まる。体型は基本中肉。そこは言わずもがな。まあ、動きやすいからな。
　顔だけは、ロボットぽい。それでもみないろいろな顔を選ぶ（一応何パターンかから選べる）。人っぽくするのもいるが、あまりに似させるのはボツになる。人間とマイセルフをすぐに区別させるためだ（ロボコップみたいに、ある種の不気味さを帯びてしまうからという理由もあるが定かではない）。
　そのマイセルフを真の相棒にするために、まずは1年。そいつと付きっ切りになり、モノにしなければならない。それが初めのミッションだ。
「ここまでで、何か質問はあるか？」
　高田が隆起に尋ねた。一応言っておくが、ここには高田のほかにあと二人の隆起の上司となる（なった）男がいる。名前すら出さない（考えていない）その2人は、未だに言葉を発していないし、隆起がこの部屋から退出するまで、一言も発しない。だが、気にしないでほしい。
　隆起はその二人のことは気にしないことにして、取り敢えず、初めから気になっていることを質問した。
「その、マイセルフってなんですか？」
　高田は、いま説明したばっかだろうが！と言いたげな顔をしていたが、すぐにニコッと微笑み、答える。隆起も、本当は違うことを聞きたかったのだが、さっき気にしないと心で誓ってしまったため、

したかった質問ができなかったのだ。だから、高田の顔がめちゃくちゃ怖かったが、それこそ我慢するほかなかった。第一、高田の名前すら、まだ知らない。

高田がパチンと指を鳴らした。するとどこからともなく、3人の男が現れた。何かを抱えて。もうすでにそれがマイセルフ（プロトタイプ）だということは想像できたが、後ろに回した首を、その男たちに合わせて元に戻す隆起は、ただただ黙っていた。てか、高田（名前は知らないが）以外の2人、いらなくない？と、本気でこの瞬間に感じたが、胸にそっと仕舞い込む。

マイセルフ（想像）を持ってきた男たちもすぐにいなくなり、どうでもいいが、この課に配属されて何年かしたら、僕もそのマイセルフ（プロトタイプ仮）を運ばされる役をやらされるんじゃないか？と、別の不安に襲われた。あのパチンと指を鳴らした仕草にものすごく嫌悪感を覚えたが、万が一でも「あー、確実だよ」とは滑らせないように気を付けた。そんなことを考えてもいない顔を作り、隆起はただ黙って言葉を待った。

「一目見れば理解もしやすいだろう。これがマイセルフだ。ただし、プロトタイプ、アベレージモデルだけどな」

高田は、ニヤッと笑う。アベレージモデルか。あくまでも予想を外させたいらしい。その根底にあるのは、優越感。隆起も合わせて苦笑い。高田はさらに得意げににやける。

「君は、自分に合ったマイセルフをオーダーメイドし、1年間ともに暮らし、君の完璧なパートナーにこいつを仕上げてもらう。育て方は君の自由だ。ただし、ここにはその1年間来ないでもらいたい。3か月ごとに報告には来てもらうが、君の独自の教育でそのマイセルフを育てるのだ。そのために無駄な先入観を持たないのが原則だ。育てるために、ここの訓練施設を利用することや、必要な経費は使ってもいい。その際に、領収書はきちんと取っておけよ。たまに経費で落ちないものもあるから、それは自腹を切ってもらう」

大体理解できた。隆起は段々と面白くなってきたことを実感して

いた。しかし、こんな技術がもう実践化されているなんて驚きだ。でも、それならそいつらに任せればいいのでは？僕たちが前線で戦う意味がないだろう。

「ちなみにだが、このマイセルフにはモラルなどは教えられない。凶悪犯の情報はある程度入れることはできるが、警察の情報にない、例えば初犯の犯罪者を自分で見極めて人間のようなモラルで逮捕することはできない。射殺か、逃がしてしまう（人質のフリなどをされた場合）かどちらかだ。似ているだけで、人質を撃ってしまうこともある」

だから君たちが必要なのだよ。と、言いたげな得意げな顔をする高田。隣の2人もクスクス笑っている。隆起はなるほどと。嫌味っぽい物言いには全く反応せず、納得することができてよかった。

「ここでの、説明はほとんど終わったが、何か質問はあるか？」

神妙な面持ちでいる隆起。高田たちが質問はないのか？と、隆起の顔を覗こうとするも、俯き気味の隆起の表情を見ることはできなかった。じゃあ、もういいか。と席から立ち上がろうとしたとき、スゥーと、何かが顔の位置まで上がったことに気が付き、動きを止めた。その上がったものは、もちろん隆起の腕だ。挙手だ。1人しかいないこの場で挙手をしている。

「なにかね、隆起君？」

今、立ち上がろうとしたため若干乱れた書類を、意味もなくまた直した。結局何に使ったのか？それも聞きたかったがすぐに本来の質問を思い出し、やめた。

「1年間・・・そのマイセルフとかいうのを育てるのは分かりましたが、その間の給料は？出なくちゃ生活もできませんよ」

本当は2人分出るのか聞きたかったが、口を噤んだ。高田は隆起の質問に笑いながら答える。

「ああ、出るとも。ただし、1人分だけどね」

隆起は聞こえないぐらいの舌打ちをした。すべてはお見通しなのね。

で、今日がその3か月目だ。・・・さて、どう報告すればいいのだろう？

植木　仁（後書き）

パソコンで書いてますので読みにくかったらすみません

マイセルフ

僕・・・佐藤隆起（まだあまり覚えられていないだろうから自己紹介・・・さとうりゅうきです）のマイセルフ（マイセルフです。僕じゃないよ）を一応紹介しておきます。

顔は・・・なんて言えばいいんだろう？デッサンの時とかに使うマペット人形？のような頭に、二重丸の目が２つ。鼻はなくて、口は曰くみたいな顔（◎曰◎）。適当な帽子と必要なら顔にサングラスなどをかけさせているから、すぐにそれがマイセルフだとは気が付かない。

日常生活では、一応マイセルフの存在はトップシークレットなので一般の人たちにはばれないようにしなくてはならない（もっとも、動きが本当に人間に近いのでそのままの姿でも、「あの人、変な格好している」程度にしか思われないだろうが。一切しゃべらないし。むしろ、一緒にいる隆起のほうが恥ずかしいので変装させる）。ほかの特殊警察課の人たちも、普段は変装させるのが常識だ。

背丈は隆起と同じ１７９ｃｍ。１８０ｃｍにしようかとも思ったが、それは見栄なのかなんなのかわからず、１ｃｍマイセルフを大きくしたところで虚しいだけだと思いとどまり、やめた。同じ背丈にした。体格は若干細目に設定。細さや厚さはあまり強度に影響しないというので（それでも太いほうが強度は増し、細いほうが動きは速い）、少しでも邪魔にならないように細目にしておいた。ただ、完成して気が付いたことは、同じ背丈だと一緒に行動することが基本なので、「双子？兄弟？」と思われてしまうのがやはりネックだった。

この恥ずかしさを乗り切れれば、真のマイセルフの使い手となれるだろう（と、３か月毎の報告の際に上官から言われた）。

マイセルフを支給された瞬間から、僕は花粉対策用のメガネのようなものを渡され、それを常時、付けておけと指示された（実物の

花粉用のメガネよりはスタイリッシュで軽く、柔らかく、掛けていてもほとんど違和感なかったのが幸いだ。そこは開発部も考慮してくれたようだ。というか、苦情が山のようにあったらしい。当時は・・・）。

「寝ているときもですか？」

と、隆起がその開発部の人に尋ねると、その人はぶっきらぼうにボソッとつぶやいただけだった。

「常時・・・です」

その開発部の人の名前は森永・・・（自己紹介されたわけではないので下の名前は分からない。名札にただ、開発部　森永もりながと書いてあるだけで、他は知らない）。かなり怖い。才能やひらめきに関しては右に出るものはいないそうだが、その反面、人との関わり合いは苦手とか嫌いとかでいう言葉では収まらないほど、無になりたいそうだ。事実、何かを渡す時だけ出てきて、それ以外はずっと研究室に籠っている。

渡す理由も面白い。作ったものを（テスト以外では）本人に直接渡さないと信用できないらしい。誰かに渡して「渡す前に失くし（壊し）ました」というのが嫌なんだとか。そんなことは有り得ないし、簡単に壊れるようなものも決して作らない。その意味では（穴倉好きの）まじめな天才。いい意味で。いい意味以外でまじめな天才とは普通は言わないけど。

そのメガネのようなものは、そこから着用者の思考などをマイセルフに転送する為の装置。ここから1年間かけ続けなければならないものだ。どんな時でも相棒（感情・モラルがなくてもマイセルフにとっても人間は相棒だ）の行動パターン・思考パターンを知っておく必要がある。どんな時に助ければいいか、どう助けてほしいのか、どうしてほしいのかを覚えさせる必要がある。出来ないとマイセルフは不完全なのだ。

このメガネのような装置は（マイアイと呼ぼう）、マイアイは着用者の思考などをマイセルフに転送するだけの装置ではない。マイ

セルフの視界もそこから着用者に送ることもできる。普通はあまり使わない機能だ。戦いの最中、マイセルフの視界まで見えてしまったら普通の人なら戦えない。あくまでマイセルフを偵察に使う時のみに使ったり、訓練中にちゃんとやっているかを確認するための機能だ（マイアイはかなりダサかったな。なんかないかな？）。

メガネ（もうメガネでいいや）は実戦でも使うが、そのほとんどの機能は使わない。近場にいるときの直感に対応するためのものだ。例えば、相手の足を撃てと、自分じゃ出来ないときなどに脳からテレパシーのように指示を送るためのものとして使われている（本当に何かいい名前ないかな）。

隆起はとにかく、本当に日常生活でパートナーになるように努めた。買い物や雑用。あえて射撃や体術は教えなかった。一度やらせてみたら、こと、戦闘においては完璧なものを見せてくれた。それ以来、毎日のように組手を日課に取り入れた。

組手の際、１日置きにメガネでマイセルフの視界を見ながら戦った。見ながら行う戦闘と、純粋なスパーリングのような戦闘を訓練したのだ。体術はもともと素人の隆起なので、マイセルフと一緒に師匠に学んだ。マイセルフのほうが確実に覚えるのが速かったが、ある程度の日も経てば、実力は均衡していた。それでも組手の時いつまで経ってもマイセルフには勝てなかった。痛みを感じないだけ、マイセルフのほうがずるい。

体術のトレーニングは警察の訓練所を使った。ついでにそこで射撃の練習もした。たまに居合わせたほかの警察官の人たちも、やはりマイセルフの腕前には舌を巻いた。隆起もそこそこの腕だが、マイセルフの前では薄れて見える。

あとは更なるコンビネーションを育てるために、２Ｐ用のゲームもしてみたが、その腕は隆起が勝っていた。それだけは、いつまでもマイセルフには追いつけなかった。むしろ、ゲームでは隆起がマイセルフをフォローしている。本末転倒でおかしいが、ゲームの話だから別にいいだろう。

隆起も初めのうちは、それなりにマイセルフに話しかけていた。意味があるのかないのかわからないし、内容も陳腐だ。
「は、はじめまして・・・」
「・・・」
「僕は佐藤隆起と申します」
「・・・」なんとなく頷いたような・・・気がする。
「き、君の名前は？」
「・・・」当然、答えなくとも・・・そういえば、名前なんて決めてなかったな。何にしようか？・・・えーと、マイセルフだったよな。マイ・・・マイセルフ。・・・マイ・マイセルフ。マイ・マイセルフでいいじゃん。マイセルフはどことなくうれしそうだ。でもこれ・・・なんかと被ったりしてないよな？
後日、その名前を使っているものはいないかと、特殊警察課に問い合わせてみると、「今のところ、一応居ませんよ」と、言われた。一応という物言いが少し気になったが、誰も呼び名を特別に登録したりしているものがいないから一応と言わざるを得ないらしい。それでも、こういう問い合わせは毎回あるようで、念のため、その時言われた名前はメモ控えておいているらしい。今のところ、そんなに名前付けのかぶりはしていない。あとで変えたやつは知らん。とのことだ。
途中から、話しかける行為は、いつの間にか隆起の独り言になってきていた。
「その技はやめてくれよ」
「そこでそれ？」
「いやいやいや」
「マジ？」
全部、隆起の独り言。たまにほかの警察官や一般の人たちから気の毒な目で見られていたが、感覚がマヒした隆起には些細なことでしかなかった。みんな、マイセルフといるとこうなるらしい。一度だけだが、同じ特殊警察課に所属していると思われる人とすれ違い、

声をかけられたことがあった（隆起には特殊警察課に誰がいるかなんて知らないから声をかけることはできない）。
「順調にカオスってるねー。４～５か月ってところだな」
その声掛けに隆起はびっくりした。そんなことは初めてだったから。声をかけて来たのは男だった。名は日向純一（ひなたじゅんいち）２５歳。神奈川支部の先輩だ。今さらだが、隆起も純一も神奈川警察にいる。日向純一はざっと見積もっても１７０ｃｍあるかないかの身長だ。マイセルフっぽいのが横にいて、それは少し小さかった。１５６ｃｍってところか？
「あ・・・あの・・・あなたも特殊警察課の方なのですか？」
そう尋ねたものの、日向は隆起の問いかけには無反応だった。例え、相手が特殊警察課の者だとわかっても、その者と話をしてはいけないのが原則だ。無視をして去っていく純一を見ながら思った。なら話しかけてこないでくれよ。と。てか、そっちから話しかけてくるのはありなのか？
隣にいたのは、よく見たら女性で、彼女なのだろうか？・・・なら尚のこと、そんな話させるようなこと言ってこないでくれよ。と、隆起はものすごく言いたかった。
マイセルフとの生活が始まってから約半年・・・２度目の報告が終わった直後辺りから、無口期間が始まる。何をしていても、何をしゃべっていても言葉が返ってこないことは、隆起から言葉という概念を捨てさせてしまった。それはマイセルフに対してだけじゃない。買い物に行っても（その間に料理などをマイセルフにやらせた。そこはものすごく便利だった）誰とも会話・・・会話どころか一言も言葉を発することなく過ごした。どっちがマイセルフなのかわからず、気が狂いかけた時期もあった（その意味でも、マイセルフの顔を人間に似せないようにする必要があったようだ）。
リストカット寸前のところで３度目の報告。そこで、こんなアドバイスがあった。
「佐藤君。大分疲れが溜まっているね」

「・・・」
隆起は答えない。必要な報告をしたから。担当の者は隆起が答えなくても、微弱な反応が見えたので続けた。
「今の時期に、君のように病んでくる者は珍しくない。むしろ、健全に君のマイセルフと向き合っている証拠だ。だから、思い出してほしい。今もかけ続けているそのメガネは、今も君の情報をマイセルフに送っている。だから、マイセルフもどっちが自分なのかわからなくなったり、君が相棒で自分がマイセルフだという認識も常に、君と一緒にしているんだ」
「・・・」ぴく。と隆起の肩が動いた。本当にぴくとだけ。
「つまり、今を乗り切れば、君も、マイセルフもより、自分の役目、役割が分かってくると思う。クリアーになると思うよ。そうすれば、あとは簡単だ。休めばいい。ただひたすら、最後の報告の時まで休めばいいだけだ。うまくいくよ。君たちはきっとうまくいく」
最後のセリフ・・・というかその他全般も、他の新人たちに言い続けてきたセリフの言い回しだ。段々と、その言い方が洗礼されてきている。大半は、そんなこと誰にでも言ってるんだろ。と思って聞き流しながらも、胸の奥や頭の端っこに留め置いておき、役立てさせるのだが、隆起は違っていた。もう胸の真のところに届いていた。
「・・・・・・」
隆起は相変わらず黙っていたが、微かに、コクリと頭が垂れて戻った。意識か無意識かは分からない（本人にも）が、今、確かに隆起は頷いた。意識か無意識か・・・それを知っているのはマイセルフだけだった。誰にも言えないが、マイセルフだけがメガネを通して知っていた。
その日はそのまま家に帰り、何もせずに寝た。マイセルフも、先に隆起の寝る準備だけして、もう休んでいた（専用の箱があり、充電しながら休んでいる。充電時間はフルで１０時間だが、活動時間は２４時間可能だった。だから、相棒が眠る時間に一緒に眠れば、

大概は充電が終わっている）。
「お前には、なんでもわかるんだな」
「・・・」
そういうと、無言なのだが「当たり前だろ」って返されたように思えた。当たり前か。そりゃそうだな。隆起はニコッとしながら、深い、本当に深い、眠りの一番底に着くほどに深い眠りにつき、そのまま2日間眠り続けた。よほど疲れていたのだろう。起きた時、体の隅々が痛くなった。マイセルフがそっと近づき、体をマッサージしてくれる。
「ありがとう」
「・・・」
マイセルフは答えずとも、何も言わなくとも、隆起に優しくマッサージを続けてくれていた。
思考や痛みが分かるのだから、丁度いい加減にマッサージできるのは当たり前のことなのだが、隆起とマイセルフの絆は強まった。
さて、気が付けばもう1年経っていた。この報告で最後になる。これから先、一体どうなることやら。不安は山ほどある。けど、希望はそれ以上に・・・。

メンバー紹介

特殊警察課に所属され、すでに2年の月日が経っている。初めの1年目でマイセルフを育て、僕こと佐藤隆起（さとうりゅうき、20歳になりました）は晴れてマイセルフ試験も合格し、半人前だけど特殊警察課の警察官になれました。

うん。やることがない。特にテロなど起こらず、隆起のような新人の特殊警察課の人間は、交番勤務やパトロール、交通安全、取り締まり、など普通の警察官と同じことをやっていた。

時には張り込みの手伝いなどもやらされ、警察の（えらい役職以外の）ＩＤはほとんど持っていた。持たされていた。その間にも、当たり前のようにあのメガネ（マイセルフに着用者に心理などを覚えさせるアレ）は着用し、マイセルフも同じように交番勤務やパトロールなどを行っている。

たまに違う県での特殊警察課の活躍を聞くと、うらやましくもあり、悔しくもあった。もどかしさが一番かもしれない。勤務歴五年になる日向純一（ひなたじゅんいち。27歳）も隆起と同じような心情だが、最近では「まあ、警察官としての務めは熟しているからいいか」なんてぼやいている始末。

ここで（タイミング的にはいいか？）、特殊警察課に所属しているメンバー（仲間？同僚？）を紹介しよう。

あえて、今さら言う必要もないが主人公の佐藤隆起。自身のマイセルフの名前は『マイ・マイセルフ』（名付け親は本人）。マイセルフの大きさは隆起の身長と同じで１７９ｃｍ。職務歴は二年。出動したことは、当然ない。

続いて日向純一。身長１７０ｃｍ。自身のマイセルフの名前は『バディー』（名付け親は本人）。バディーの大きさは１４０ｃｍほど。小さいほうが役に立つかと思ったからだ。職務歴は五年。出動したことは、隆起と同じでない。ないがために、バディーが役に立

つかもまだわかっていない。その特徴がしっかり活かせるかは、未だに不明だ。性格はまじめ。でも程よく適当。まあ顔も悪くない。
最後に（え？と、思うかもしれないが現場で戦う者は3人しかいない。隆起のような現場型は3人ということ）松岡真治（まつおかしんじ、３１歳）。身長１８６ｃｍ。自身のマイセルフの名前は『グットアック（グットラックの言い間違えをそのまま）』（名付け親は高田。だから適当なのだ）。アックの大きさは２００ｃｍ。真治は日向と逆で、アックを大きくしていた。職務歴は九年。出勤は・・・2度ほどある。銀行強盗の鎮圧と、大型デパートジャックの鎮圧だ。2回とも、アックは予想外の活躍を見せた。2度ともアックが目立ってくれたおかげで真治自身が暗躍でき、事態を収拾するのに一役買ってくれた。結果オーライだ。
一応あと、司令部の者なども紹介したいが、ここは名前だけにしよう。総司令官があの高田伸晃（たかだのぶてる）。技術部に森永。あとは高田の下に3人・・・名前はいいか。
隆起と日向と真治はほとんど顔を合わせない。金曜日の夜だけだ（それも毎週ではない）。かといって話もろくにしない。話すこともあまりなかった。
そんな代わり映えのしない毎日を、退職するまで普通の警察官するのかなー。と思いながら過ごしていると、突然に連絡が入り、事態は急変した。
隆起たちの持つ特殊な携帯が一斉になりだしたのだ（ただの支給品の携帯だが）。3人とも今は別々のところで、それぞれの職務をしている。しかし、それが鳴ったらもう行くしかない。それはもちろん、特殊警察課にと思っていたら、その携帯からは現場の場所と地図がメールで示されているだけで、他には何もなかった。
現場に一番近かったのは隆起だ。しかし、とにかくこの任務命令自体初めてのこと。一体どうすればいいのかなんてまるで分らなかった。しかも、最悪なことに、今まで通常任務（警察官としての職務）をしていて、それを勝手に抜け出したことになっている。その

言い訳は自分で考えなくてはいけなかった。もしその言い訳が通らなかったら、流石にクビにはならないが、減俸とうの処罰は受けなくてはいけないのだ。

なんという不条理。毎日その言い訳ばかり考えていても、うまく伝えることができるだろうか？本当に無理難題を言う（でも、この特殊任務が行われた際には特別ボーナスが出るので、そこまで悪い話ではないが、そういう問題でもない）。

とにかく今は、高田を探せ。隆起とマイセルフは手分けして高田を探した。

ここは、とある有名な高校。当然神奈川にある高校なのだが、ここにきて、ピーンと来ない者はいない。ある用人の娘が通っている高校だ。高校の周りはすでに人だかりとなり、警察も駆けつけている。高田は野次馬に扮して、この人だかりの中に紛れていた。いつまでも隆起が見つけられずにいるから、高田から声をかけて来た。

「ここだ。どこ見てんだ？」

と、高田が怒るもんだから、隆起も慌てて「すみませんでした」と平謝り。顔を隠すように帽子を被り、完全、完璧に一般人の野次馬親父と化していた高田をここで見つけるのは、あの有名な『何とかを探せ』をしているよりも難しい。今ここに誕生した『高田を探せ』には一切のヒント、一切の特徴はなく、この男は本当に無理難題を押し付けてくるのが好きらしい。

そんな高田が今の状況の説明を始めようとしている。まだ全員揃っていないというのに、説明し始めてもまた同じ説明をほかの２人に繰り返すだけだぞ？そう思っていても、武田はなんの躊躇もなく説明を始めてしまった。

「この高校は、分かっていると思うが、あの、有名な、あの用人の娘さんが通っている学校だ。知ってるよな？」

隆起は高田にうなずく。当たり前だった。一応は隆起も国家公務員の一人だからだ。どれほどのものと高田は隆起のことを思っているのだろう？聞くことでも気にすることでもないが。

隆起が聞き返す。
「その高校が、この騒ぎは一体なんなんですか？僕たちが呼ばれるほどの何かが起こったのですね？それはなんですか？」
「それは今から話す。が、全員が揃った時、佐藤がまとめて説明しておいてくれ」
「？どういう意味ですか？」
首をかしげる隆起を余所に、高田の説明は呆気なく終わった。遅れて、ほぼ同時に日向と真治が到着した。少し探して、この２人はすぐに高田と隆起を見つける。高田が嫌味ったらしく2人を褒めまくっているが、この2人は隆起とそのマイセルフのことを探していたから簡単に見つけられたのだ。
現に隆起を見つけた時、「おーーい。高田さんはどこにいるんだ？知ってるか？」と、言おうとした直前で高田が声をかけて来た。正直、近づいてきたのが高田だとは思わなかったし、そのことで（高田の性格上）隆起に嫌味を言っていることを察し、そっと2人は隆起に謝っておいた。いつものことだ。隆起は全く気にせずに、２人に状況を分かりやすく説明する。
今、起こっていることはこうだ。この高校は今、まさに今テロリストたちに占拠されているらしい。教師、生徒はほとんど解放されているのだが、用人の娘のいるクラスの教師・生徒は全員捕まって人質と化している。詰まる所、金目当ての誘拐事件だ。違うな。金目当ては正しいが、人質立てこもり事件だな。
「大体事件はこんな感じ・・・らしいです」
４人が人だかりから離れて円陣を組むように作戦会議をしている。ほとんどの人が、やはり、この人質立てこもり事件のほうが気になるようで、まったく後ろの方で出来上がった円陣には気が付いてもいない。まあ、見た人たちにはクスクス笑われていたが仕方がない。わざわざ円陣を組んだのはそのためでもある。周りの音を掻き消して（多少は聞こえるがそこは無視で）、４人は作戦会議に集中する。
「でも・・・いっつもこんな感じなんですかね？」

「こんな感じと言うと？」
隆起の疑問に日向が聞き返す。分かるだろ。聞き返さずとも。なんで作戦会議を円陣組んでやるんだよ？当然の疑問だ。だけど、日向の聞き返しにより、隆起はもう言葉を噤んだ。なんだろう。なぜだろうか。それ以上は何も言う気がなくなった。
「なんでもありません。会議を続行しましょう」
全員がうなずく。余計なことで時間を割いている時間がない。隆起は空気を読むまでもなく、話を戻した。高校が占拠された今、そんなことはとても些細なことだった。
高田が現在の高校の中の状況を教える（その説明、どう乗せようか迷うとこだがここは高田が言ったことをそのまま載せよう）。
「犯人グループは全部で２１人」
「そんなにいるんですか？」
驚いたのは意外にも真治だ。日向はそっちに驚き、目を見開いた。確かに、２１人は多い。でも、そのぐらいのほうが面白い。正直、高田も言ってからその犯人の多さに後悔した。
「ああ、２１人だ。２０人でも２２人でもない。問題はそこじゃない。犯人が身代金と脱出経路を確保するまで動かないことと、一か所にまとまっていないこと。見張ってなおかつ、見回ってもいるらしい。当然ながら、校舎に入っても見つかれば即、立て籠もっているクラスのほうに情報が行き、人質も皆殺しにされるだろう。もしかしたら、そのあと犯人グループも死を覚悟で戦争を仕掛けてくるかもしれない。どのみち、見つかれば終わりだな」
「うへへぇぇぇぇぇぇぇ」
「ここはひとつ、金で解決するのもいんじゃないですか？」
日向をジロッとみんなで睨み付ける。日向は「じょ・・・冗談ですよ」と慌てた様子で今言ったことを否定した。でも、その考え方もありっちゃーありだ。しかし、まだ一度も戦闘の一つもしていない。金で解決してしまえば、それこそ、次の出動の機会がいつになるかわからない。やはり、ここは戦うことにした。それは避けなけ

ればならない。
「ですが高木さん。まさかの隠密ですよね？私たちは、・・・私はこれで3度目になりますが（それでもまだ3回目なんですが）、日向や佐藤は初めての任務になるのですよ。大丈夫ですかね？」
真治がまじめ顔で真剣なことを言う。日向と隆起にとって無駄にプレッシャーになった。高田が次にいう言葉は決まっている。聞かずとも、なんていうのか分かっている。一応聞いてみるかと思う前に「馬鹿野郎！！！何のための特殊警察課なんだ！！！！」と、周囲の人たちも振り向いてしまうほどの怒鳴り声で怒られてしまった。そんなに甘くはないし、当たり前だ。
この真治という男は何を考え・・・ちらっと真治の表情を盗み見ると、真治は小さく、でも確実に笑っていた。この男、分かってわざと言いやがた。その意図は？気合と責任感とこの任務の重要性を二人に叩き込むため・・・と、勝手に解釈することにした。そう解釈せざるを得ない。
「話を続けるぞ」
高田がイラつき始めている。そりゃそうだ。マジにまじめにならないといかん。事態は思っている以上に深刻だ。よし、会議を続けよう。話はそれからだ。

メンバー紹介（後書き）

次の話からバトルになっていきますよ

高田伸晃（前書き）

タイトルは高田ですが、ここで主人公・佐藤隆起がやっと活躍します（#^・^#）見てやってください（（＋＿＋））

高田伸晃

隆起は、東校舎を制圧することになった。あまり敵、テロリストがいないところだからだ。日向は西校舎。ここにもあまりいない。真治は正面校舎だ。正面校舎にはテロリストの本隊がいる。そこに用人の娘がいるクラスがあるからだ。

東校舎は、正面校舎から少し離れている。体育館（アリーナ）があり、職員室などもそこにある。

西校舎は、正面校舎に繋がっている。しかし、かなり用人の娘のクラスとは距離があり、あまりテロリストもいない。だが、繋がっているので見張りは多い。この校舎は正面校舎と同じく４階建てで、３階からはなぜか、正面校舎に行けない作りになっている。よくわからない作りだ。

正面校舎は、西校舎とほとんど変わらない。

何とか、隆起とマイセルフは東校舎にたどり着いた。当然、いつまでも警察官の格好はしていない。防弾などに強い特殊警察専用コスチュームを着こみ（無駄に迷彩カラー）、あのメガネをかけ、手にはサイレンサー付きのハンドガン。

ハンドガンも特殊仕様であり、コルトに似ているがそれよりもさらに小型で、射程が１５～２０メートルほどしかない。出来る限りの消音を期待したのだ。ただ、弾ぶれはほとんどない。けど・・・かなり接近しなくては当たらない。当たっても痛い程度にしかならない。使えるかは疑問だ。

一応マガジンを５個。弾は５５発。マイセルフも同じ装備をしている。が、今回の任務でそんなに弾は必要なさそうだ。そんなに使っていたらすぐにばれてしまう。

ここまで来るのも、意外とひと苦労だった。それも高田があまりにも役に立たなかったからだ。隆起たちが特殊警察課だと説明するも、警察の機動隊になぜか門前払い。自分たちでなんとかできるか

ら心配するなとのこと。
「高田さん？これは一体？」
不安気というか胡乱気に尋ねたのは日向だ。門前払いされた４人は、かなり惨めだった。四人の周りだけ、冷たい風が通り抜けた。
「えーと、私たちにはあまり実績というものがないからなー。期待のマイセルフも、秘密だから説明できないし。機動隊より優っている証明ができない」
「わかりました・・・て、引き下がれるか！！！これじゃあ話が進まねーじゃねーか！！どうにかしてくださいよ、高田・・・さん！！！」
日向がかなりキレていたが、それは全員に言えることだった。高田も、そのキレっぷりに、生命の危機を感じたらしく、そこからの交渉は必死、死に物狂いだった（そもそも交渉している時点で本末転倒なのだが）。
そして、奇跡的に何とかなった。侵入の方法は至ってシンプルだ。隆起、日向、真治がそれぞれに別れ、侵入する校舎の死角になる場所から、テロリストの視界がはがれた瞬間に単身で乗り込んだ。マイセルフたちはそのあと、少し経ってから同じ方法で乗り込む。真治のマイセルフ『グットアック』がやはりデカすぎて、ばれない為に苦労したようだ。
隆起は自身のマイセルフと合流し、東校舎の状況を読み取る。テロリストたちの人数は五人。簡易式のレーダーのようなもので、それで簡単に調べることができる。巡回している奴が二人。正面校舎を見張っているものが1人。あと2人が周りを見回っていた。
「問題はこの、巡回している2人だね。あとは、こっそり近づくことができれば、鎮圧するのは簡単だ」
マイセルフを見ると、軽く頷いた。よし、調子はよさそうだ。
この東校舎は西と正面と違い、3階までしかない。1階は多目的ホールや柔道場、それにトイレがある（トイレは全階にある）。2階には職員室や校長室などがあり、3階はアリーナだ。

「テロリストたちは、今、見張りを覗いて・・・巡回が2階と、すぐ近く1階の多目的ホールにいるね。こいつは、いや、こいつら全員・・・かなり油断しているね」
巡回している奴も、レーダーを見る限り、動きが遅い。立ち止まってもいる。テロリストとしても、犯罪を犯しているものとしての自覚がないように思える。ゲームじゃないっての。
隆起は一応、大事を取って、多目的ホールにいる1人はマイセルフと一緒に制圧することにした。音もなく近づき、ドアの前に立つ。レーダーでは、多目的ホールにはかなりの椅子が並んでいるようで、そいつは丁度真ん中付近で立ち止まっていた。どこを向いているのか、それは分からない。
「マイセルフ・・・上に小窓があるから、中の様子を見てくれないか？」
そういうと、マイセルフは昆虫のように壁を伝い、端っこからそーと中の様子を探ってくれた。そこでメガネからマイセルフの視界を覗きこんだ。テロリストは手にマシンガンを持ってはいたものの、あろうことかホールのほうを見ている。何やってんだ、こいつは？仕事は違えど（って犯罪者だが）まじめにやらない奴を、隆起は大っ嫌いなのだ（そもそもそいつは犯罪者だし）。
マイセルフを上で待機させ（その姿はまるで・・・いや・・・）、隆起は静かに、物音一つ立たせずにドアを1人通れる分だけ開け、そのまま閉めずに進んだ。閉めたら余計な音が立つからだ。何より、迅速にことを終わらせる方を優先させていた。
そのテロリストは、全く隆起に気が付いていない。呑気に鼻歌のような鼻息が聞こえてくる。その間、マイセルフに周囲（もう1人見回りをしているテロリスト）を見張らせ、隆起はメガネからマイセルフの視界と、目の前にいるテロリストの動きを見ながら近づいた。
ドアを開けた瞬間から、隆起は呼吸を一切していない。まるでゴーストのように（ゴーストに感情移入をさせながら）、・・・と近

づく。そして、ゆーっくりとそのテロリストの背後に回り込む。真後ろに隆起が立っていても気が付かないほどの無音。気配すらも、無と化している。
　隆起は、テロリストに思いもかけない行動に出る。不意にその油断しきった男の肩に手を置いたのだ。
「わ！！！」
　と、言った瞬間に、隆起は男の口に手を当て、男はもごもご言うだけで何も言えなくなった。マイセルフの視界を見ても、その声にほかのテロリストたちは全く気が付いていない。隆起は、にこっと笑い、男の首を絞め、落した。手際よく、口を縛り、手足を縛り、服の中を探る。
「さすがに身分証名書は持っていないか。でも、仲間とのれ・ん・ら・く・に・・・あった」
　男の服の中から携帯用の無線機が出てきた。これで連絡を取り合っていたようだ。そのマイクに小さいシールのようなものを張り付けた。
「これで良し。マイセルフももうこっち来てもいいよ」
　呼んだが、隆起自身にもうこの多目的ホールには用がないので、マイセルフが来る前にここを出た。マイセルフも隆起の思考が分かっているのでじっと待っていた。もう天井には張り付いていなかったが。
「・・・じゃああとは、取り敢えず（まだ2階にいて動かない）もう1人の見回りを捕まえに行こうか」
「・・・」
　レーダーを見ると、2階にいるテロリストは職員室にいた。隆起は先ほど取り上げた無線機をマイセルフに持たせ、窓などから見えないよう警戒しながら進む。階段を上るときが一番神経を使った。
「ここで見つかったらアウトだ」
　レーダーで動きを確認しながら（テロリストはなぜか職員室からは出ようとはせず、中をうろうろしていた）、慎重に階段を上って

行った。呼吸は線のようにか細く、それでいて落ち着きを払っていた。マイセルフも、天井までは伝っていけないし、ましてや、そんなことをしたら窓から丸見えになってしまうので、隆起の後ろを若干離れて進んだ。

職員室の前に着き、ドアについている窓を覗いて気が付いた。この中は、外から丸見えの全面窓ガラスだった。どうやって中に入ればいいんだ？ドアは職員室の前と後ろに付いている。今いるとこを前というならば、後ろの方からも中を覗き込んでみた。前を遅くたどり着いたマイセルフに見張らせながら。

「こっち（後ろのドア）のほうが、ほかの校舎から見えやすいな」

窓からドアの距離は１２メートル（もないかな？）ぐらいあり、通常なら窓の外からなんて見えやしない。しかし、ここは２階なのだ。見えてしまう。テロリストは教師たちの机の引き出しを物色していた。めったに見られない上に、とにかく油断しているのでそんなことをしているのだろう。

「どいつもこいつも・・・まったく」

と、言いながらも、そいつはドア方向に体を向けているので、慌てて身を潜めた。マイセルフも待機するように命じる前に待機している。隆起はそっちに行った。行くも、今はドアを開けることはできない。テロリストがこっち側を向いている限り。

「待つしかないのか・・・」

少しだけ中の様子を覗き込むと、テロリストの姿が消えていた。なんだ？と、理由を考える間もなく、マイセルフがドアを開けていて、瞬間、隆起が中に乗り込み、すぐに閉めた。１秒も満たない間。風すら立たない、立たせない動きで、そのまま隆起は職員たちの机の陰に隠れた。

かすかに聞こえるテロリストの舌打ち。おもむろに姿を現し、手に何か持っている。何かを落し、拾っていたようだ。入るのが刹那でも遅れていたらドアの開閉に気が付かれていた。隆起は運以上に、マイセルフとのコンビネーションの必要性、重要性、価値に興奮し

ていたが、もちろん今も、無呼吸だ。興奮しても、心拍数を上げる訳にはいかなかった。
いくら訓練していても、運動しながらの無呼吸には限界がある。最悪なことに、このテロリストは机から出したものを無造作に床にばら撒いている。そんな中を、距離にして6メートル。無音で接近しなくてはならない。
男が見飽きたのか、次の机に移動し始めた。チャンスだ。男の移動は5歩程度だが、隆起の移動音を消すには十分な足音だった。さらに、チャンス到来。男は思っている以上に雑な性格らしく、机の引き出しを開けるのも大雑把でうるさかった。ここで一気に間を詰める。
コンコン。小さいが、何かを叩く音が聞こえ、男はマシンガンを手にし、ドアを見る。マイセルフがドアを小さくノックしたのだ。男の視界に入ったのは、ドアではなく、人。隆起が男の目の前に立っていた。
「なん・・・」
なんだ?と最後まで言わすことなく、隆起の拳は男の腹に突き刺さり、食い込み、男はその一撃で動けなくなった。隆起は倒れかかった男を支え、さっと椅子に座らせ、とどめの一撃を顔に叩き込む。万が一、その様子を外から見られていても、急に座り込んだとしか思われない。隆起の姿は、気絶した男の陰に隠れている。
こそこそと、先ほど同様に口と手足を縛り、携帯の無線機を奪い取る。もう呼吸はしていたが、それでも来た時のように隠れながら職員室を出ていった。
「これで、東校舎を制圧するのは簡単になったね」
マイセルフにまた無線機を持たせ、話しかける。隆起は、ゆっくり西校舎のほうを見た。建物内だし、窓も気にしている隆起には西校舎を見ることはできない。
「・・・とにかく、ここを終わらせよう」
隆起は残りのテロリストを鎮圧すべく、先を急いだ。

日向純一（前書き）

日向純一を覚えてやってください（#^・^#）

日向純一

日向は、少しだけ緊張気味で、不安げに自身のマイセルフ『バディー』のことを見た。バディーはいつものように平穏無事。何事もないように佇まっている。

西校舎に乗り込んだ日向は、思い出したようにレーダーを取りだし、おぼつか無い手つきで操作する。バディーが見かねてそのレーダーを日向から奪い取り、正確に操作してあげた。

「センキュー、バディー」

日向には、意外とそういうところがあった。何かするとき、必ず人よりも緊張してしまうのだ。それを必ずバディーがフォローする。まあ、他人から見れば情けないと思うかもしれないが、それが日向のスタイルなのだ。

レーダーを確認すると、テロリストは西校舎には全部で5人。隆起が制圧した（時間的にはまだ終わっていない）東校舎のテロリストの数と同じだが、この校舎は東校舎とは圧倒的に様子が違っていた。

東校舎はいわば、見張り灯。それは正面校舎と西校舎と離れて建設された校舎だからだ。西校舎は違う。正面校舎と行き来できるのだ。なので、この校舎にいるテロリストたちはそのほとんどが見回り。巡回している。

日向は、校舎の外、校舎内からは絶対に見られない死角の中に潜伏、待機している。テロリストの1人が、すでに1階でうろうろしていた。ここも東校舎と違い、西と正面にいるテロリストたちは油断など一切していない。程よい緊張の中、神経を研ぎ澄ませながら見張っていた。

今現在のテロリストたちの位置はこうだ。（西校舎は4階まである）1階に1人（1階は教室とトイレ）。2階に2人いて、こいつらは階段付近にいる。3階には1人。外の見張りをしている。最後

の1人は4階にいる。こいつもうろうろしているようだ。４階には音楽室がある。
「ここは、全員鎮圧していくか？もしくは、どうするべきか？・・・・やっぱ全員締め上げた方がいいと思うよな、バディー？お前はどう思う？」
バディーは隆起のマイセルフなどと同じで、当たり前だが言葉を発しない。しかし、このバディーはかなり特殊で（変わっているのは日向なのだが）、日向の問いかけに『ＹＥＳ』と答えた。指で砂に文字を書いただけだが、普通のマイセルフはそのようなことはしない。
「やっぱりそう言っちゃうか、お前は」
苦虫を噛み潰したような顔をする日向に、バディーは同情するように小さく頷いた。
「さて、・・・そろそろ隆起君から報告はないかな？」
バディーを確認した。首を横に振る。まだか？少し経って、もう一度確認するも、慌てんな。時期が来ればこっちから言うよ。と言いたげなバディーが再び首を横に振った。レーダーを見ると、１人が1階に降りてきてしまった。うげっと舌を出す日向に、バディーが首を縦に振った。
「い・・・今かよ」
バディーが首を縦に振ったのは、隆起が東校舎の見張りを倒した合図だ。今、誰も西校舎の出入り口を見張っているものはいない。レーダーには1人、出入り口付近に人がいることを示していた。もう1人は？近くにはいない。つまり、今しかない。
「ふーーーー、よし」
日向は腹を括るように息を思いっきり吸い込んだ。肺が酸素で満たされ、胸からは不安と緊張が押し出されるのをイメージし、実感する。そして、一気に駆け出した。今潜んでいるところからその出入り口まで壁を伝って行かなければならない。問題はない。日向は風のように走りながらも、砂埃一つ立たせなかった。

「だ・・・」
テロリストの一人が日向の姿を確認し、声を上げかけた瞬間、目の前に何かが飛んできたので言葉はそのまま喉の奥に押しつぶされた。顔にへばりついたその何かを取ろうともがこうとするも、もがく前に突き付けられたハンドガンに畏縮し、動くことが停止してしまった。
「なんだ？どうかしたか？」
ラッキーなことに同じ１階にいた仲間が物音に気がつき、緊張を声に宿して近づいてきた。聞かれてもハンドガンを喉に突き付けられ、男には言葉を発することはできなかったが、それで異常が伝わるならよし。なんて思っていたテロリストだったが、次の瞬間わが耳と、わが口を疑って目が５００円玉ほどに丸くなった。
日向の口元が意地悪そうに歪んだ。もう１人のテロリストに答えたのは日向だ。日向は普通にこう答えた。
「だ・・・大丈夫だ。なんでもない」と。
すると、「そうか」とだけ聞こえ、特に何も起こらなかった。それもそのはず。なぜか日向からは今、銃を突き付けている男の声が発せられたのだから。日向は男にべろを見せた。正しくはべろの上に乗っかったシールだ。
「これがあると、お前の声が出せるんだよ」
日向は男にだけ聞こえるようにそう言い、突き付けた銃を剥がし、思いっきり男の頭を叩いた。死なない程度に。若干の血は出たものの、男は何も言えずに気絶した。日向に抱えられているので倒れることもできない。
日向は気絶した男の顔に、いつまでもへばりついているバディーを睨み付けた。重いのだ。バディーは、自分で投げといて。と言いたげな雰囲気を出しているが、何も言わずに黙って男の顔から降りた。よしよし。と、笑いながら得意げな日向だが、すぐに真剣な顔つきに戻る。そして見た。そこは壁だが、その向こうにもう１人のテロリストがいる。

声が聞こえた感じと、それから経過した時間から、日向はもう1人のテロリストが今どの辺にいるかの予測を立て、それは大体当たっていた。今仕留めたテロリストの拘束はバディーに任せて、日向はその男を追った。

男は、階段に戻ろうとしながらも、各教室を見て回っていた。日向は柱の陰に隠れながら男に近づいていき、ハンドガンで男の足に狙いをつける。引き金をひけば、確実に当たる（支給された銃は隆起と同じ。小型でなるべく音が漏れないように配慮されている。その分、射程距離はイマイチ）。

「どうするべきか？」

日向は男に、こともあろうかそのハンドガンを投げた。ハンドガンは滑るように廊下を伝い、テロリストの足元で止まる。男は教室の扉を閉めると、足元にあるハンドガンの存在に気が付いた。それを確認するために一瞬動きが止まった。手には取らなかったが、その確認に要した時間、わずか2秒。

ハンドガンと気が付いた瞬間に、男は手にしていたマシンガンを構える。ハンドガンの落ちていた位置から、大体の来た方向を予測し、男はそのハンドガンを投げてきたであろう人間がいる方向を向いた。向いた先には何もない。あるのは、胸のあたりで固定していたはずのマシンガンだ。

マシンガンが、男の意思に反してものすごい勢いで顔面にめり込んだ。男はそのまま日向に抱きかかえられる。鼻や口から血が流れ出すが、それすらも地面にたどり着くことは許されなかった。

「お前さんの声はもう手に入れたから、もう静かに眠っていていいよ」

バディーが日向のハンドガンを拾い、日向の腰にあるホルスターに戻した。日向はバディーにウインクする。

レーダーを確認すると、2階にいたはずの1人が、3階に上がっていた。この隙に2階に昇るも、ここでひとつ問題に気が付いた。2階に上ると、その階段からすぐに正面校舎への渡り廊下があり、

その先に見張りが立っていた。日向は下の階を見た。1階はなぜかその渡り廊下に扉か何かがあり、それが閉まっていたからよかっただけか。

「もしくは、さっきの奴はそれを開けに来たのか？」

戻り、扉を開けるべきか？関係なければかなりのリスクだ。そう思っていたら、突然バディーが寄ってきた。誰かからの連絡の合図だ。とにかく携帯（特殊警察課の特殊携帯だ）を開くとメッセージが入っていた。

「真治さんからだ。今は連絡禁止だというのに」

内容はこうだ。2階の連絡通路の見張りは倒した。とのことだ。正面校舎のほうを恐る恐る覗いてみると、遠くで真治が手を振っていた。ため息が出た。心配して損したというか、ありがたいというべきか。

「一応返事は返しておくか。あ・・・りが・・・と・・・うござい・・・ま・・・す・・・と」

一応メッセージを送った後で真治に手を振っておいた。後でなんか言われてもめんどくさそうだったので。レーダーを見るとテロリストは3階に2人と4階に1人になっていた。一気に決めに行くかな？

3階にいる1人は見張り役だ。そいつはバディーに任せればいい。あと一人は、今、階段を降りようとしていた。日向は丁度その階段の陰に隠れている（3階に着く手前）。テロリストは全く気が付いていない。

テロリストが階段に差し掛かった時、バディーと目があった。目があったといっても、バディーには目がない。眼っぽいところと目があったというべきか？テロリストが反応を見せる前に、バディーはものすごい勢いでその男の脇を通り抜けて行った。

「ちょ・・・ちょっと待て！！」

「行かせてやってくれないかなー」

バディーを目で追っていたテロリストの肩を掴むと、膝裏を思い

っきり蹴り込み、そのまま床に叩き付けた。床に血が広がる。思わず、「やりすぎた」と、口走ってしまったが問題なさそうだ。
あのメガネが反応し、バディーも目的を果たしたようだ。あいつのほうがやりすぎていないか心配だったが、バディーの視界を確認すると、気絶した（ように見える）テロリストが見えたので安心することにした。声も入手したようだし。
「残るはあと1人か・・・」
レーダーを見ると、そいつは音楽室にいるみたいだ。厄介だな。なんて言ってみたが、そうでもないかな？バディーとやれば問題ない。すぐさま4階に行く。正面校舎に続く通路の見張りは、すでに倒されていた。
「さすが真治さん。仕事がはえーや。俺も真治さんを見習って」
音楽室もドアは2つあった。後ろと前。犯人は前の扉の近くにいる。バディーを後ろのドアからそっと忍ばせる。テロリストはそのことに気が付いていない。その男は、まるで黄昏るようにピアノの前に立ち尽くし、窓の外を遠く眺めていた。
そのままバディーにやらせようと思ったが、その様子に憤慨した日向は、自分の手でケリをつけようと決意する。
ドアを思いっきり開けた。テロリストは慌てて振り向くも、なぜか体がそれ以上動けなくなってしまった。
「なんだ、こいつは？」
「俺のバディーだよ」
答えることのできないバディーの代わりに、日向が答えた。その声には怒りが混じりすぎていた。男の犯罪を犯したということ。その罪深さの認識不足が日向を完璧に怒らせた。
羽交い絞めにするバディーの拘束を剥がすことは、人間には不可能だ。解けるのは日向だけ。その日向の拳が男の頬に突き刺さる。それも1撃ではない。数えきれないほど立て続けに。矢継ぎ早といってもいい。その拳は矢のように鋭く、弓よりも強靭に放たれる。
「・・・」

その拳を止めるものがいた。バディーだ。日向は直感でこの男の『死』を連想してしまった。殺そうとすら思ってしまった。その非情な意思が、バディーに日向の拳を止めさせた。バディーには気持ちがない。機械だから。だから、その行動は、単に『誰であろうと殺してはいけない』という命令に従っただけ。

「バディー、ありがとうな」

日向は落胆する。自分自身の未熟さにいろいろな絶望感に苛まれた。でも、日向は顔を上げた。まだ任務は終わっていない。それに、悲しみと絶望はバディーも半分味わってくれている。

日向はテロリストに一言、謝った。

「やりすぎちゃったぜ。わりー」

松岡真治（前書き）

真治のマイセルフ『グットアック』の活躍を見てください（#^・^#）

松岡真治

真治はもう目の前まで来ていた。用人の娘が人質に取られている教室に。ここは正面校舎の４階。この建物にはテロリストが１１人もいた。それが今はその教室に残っている４人のみ。真治と自身のマイセルフ『グットアック』の２人でやったのだ。

真治は正面校舎に忍び込むなり、すぐさまアックと２手に別れた。真治の手にはアイスピックのような刃物。アイスピックよりはもっと細く、あまり殺傷能力はない。そのピックの入れ物の中には常に麻酔薬が付け込まれている。刺せば相手をその場で失神するほどの代物だ。

真治自身の格闘能力は、実は隆起や日向とは比べ物にならないほど長けていた。なら、何故敢えて２人と違って武器を使用するのだろうか？単にそれはマニアだからだ。それに、加減も苦手なので、些細なことで手加減ができず、必要以上に相手を負傷させてしまうのだ。

アックは真治とは違い、丸腰だ（そういえば、誰も使わないが小型の銃が支給されていた。隆起も日向もマイセルフたちも、別に丸腰ではなかった）。アックは身長２００ｃｍの巨漢だ。正確に程よくテロリストを無力化できる。やりすぎることは（多分）ない。

アックにレーダーを持たせ、アックの視界からテロリストたちの居所を確かめる。一度見れば、基本、大体把握するが、移動などして大幅に位置が変わった奴などがいれば、すぐさまアックから視界が送られてくる。それでも、真治が戦闘状況に追い込まれているときなどは、よほどの緊急でなければ視界は送らない。戦闘の邪魔になるだけだから。

ただ、初めの１階は２人で鎮圧することとなる。この階になぜか３人もテロリストがいた。

「いきなり面倒くさいな。多すぎだっての」

テロリストたちは皆、手にマシンガンを持っている。レーダーでは確認できないが、丸腰ということはない。
１階の間取りはこうだ。入るとすぐ、なぜか保健室がある。そこにはテロリストたちもいないようだ。保健室にあこがれはない。そんな場合でもない。それ以外はトイレと教室だけ。
１人が、その保健室の前で見張っている。もう一人も廊下をうろうろしていて、その保健室の前にいる奴からは丸見えだ。あと一人は、教室の中を見回っている。まじめにやっている。立ち止まっていたりしていない。
「ならば・・・俺が廊下の奴を鎮圧するから、アックは保健室の奴を頼む。一瞬で行くぞ」
真治はその言葉がまだ残っているうちに、保健室の前にいるテロリストの前を事もあろうか、大胆にも思いっきり通り過ぎた。当然、見つかった。
「おい！！！今、何か通り過ぎたぞ！！」
保健室前のテロリストが廊下をうろうろしている仲間に叫んだ。叫んだとはいえ、２人の距離は近かったので無意識にその声は小さく、もう１人のテロリストには・・・ましてや上の階にいる仲間にはその声は届かなかった。真治が走りながらもニヤッと笑う。
保健室前のテロリストは気が付いていなかった。あと数秒・・・あと数瞬で昼間っから眠りについてしまうことに。かなり強制的に。気が付くことすら敵わないが。男は、いつの間にか自宅にいた。窓から外を覗くも、その窓がいつもの場所でないところに付いていることには一切気が付いていない。
「あれ・・・？俺は何をしていたんだっけ？」
テレビもついていない（設置すらされていない）。部屋には自分の体のみ。何もする気がなかった。希望も何もなかったから。命は人並みにあったが、その使い道がまるで分っていなかった。
「・・・・・・」
外を見ていても何もなかった。やりたいことは見えてこない。男

は目を閉じて眠ろうとした。しかし、男は眠れない。すでにここが夢の中だから。
　真治のことを目で追ってしまい、アックの存在が死角になってしまっていた。アックは何度も言うが２００ｃｍ。そのアックの存在を死角にするために、わざと真治は敵に見つかるように走ったのだ。アックはその巨体からは想像できないスピードでテロリストに詰め寄る。
「・・・・・・」
　アックの左手が、男の首に巻きつく。頸部が砕けるか砕かれないかの瀬戸際の力で、しかし思いっきり。男の目は瞬きもできずに白目と化し、夢を見ることとなる。
「て・・・」
　その「て・・・」に続く言葉が「てめーーー」だったのか、「（い）ってー」のてーだったのかは確かめることもないだろう。真治は正確に太ももにある動脈に麻酔付きのピックを根元まで深々と挿し込んだ。男の顔が苦痛で歪む。ピックは細くとも注射針よりは太いので、それなりに痛いのだ。
「そのくらいは我慢しろよ。もう眠っちまうんだからさ」
　真治は、眠りに付く赤ちゃんを抱きかかえるようにテロリストを支え、そーと床に降ろした。いくら強力な薬だといっても、強い刺激を与えればすぐに起きてしまう。外傷はその太ももの刺し傷だけだから、体は元気なのだ。起きてしまったら、真治の強烈な右ストレートをお見舞いしなくてはならない。ほっとけば、数時間は眠り続けるのだから、ほっとこう。
　真治は、今眠らせたテロリストの拘束はアックに任せ、もう一人教室にいるテロリストに狙いを向けた。メガネから、アックの視界が送られてきた。テロリストは今まさにドアの前に来ていた。
「チャンス」
　アックに礼を言っている時間はない。ドアを開けられてしまったのではもう遅い。走った。いや、ただ走ったのではない・・・そう、

走れ！！音も立てず、風も起こさず、景色はそのままに、真治が移動したこと以外の変化を起こさないように・・・走れ！！！

「何も・・・わ！！！」

ドアを開けると、男が立っていた。間に合ったのだ、真治は。ドアまでの距離は、ざっと教室一つ分。１０メートル前後を一瞬で縮めたのだ。その上、真治はかなり澄ました顔をしている。誰もその偉業を見てもいないし、痕跡すらも残していないというのに。・・・だからこそなのかもしれないが。

「何もなし。だな。・・・本当か？嘘だろ」

またも真治はニコッと、笑った。テロリストの口元に人差し指を当てて「シー」といい、その男が反応を示す間も与えずに、首にピックを突き立てる。先ほどと同様、刺されるとすぐに眠りに落ち、その体をやはり優しく支える。

「このままの調子で２階も制圧だ」

「・・・・・・」

真治はまたまたニカッと笑う。アックは無反応。それでも笑った。

テロリストの数はあと８人だが、用人の娘を人質に取ったクラスに４人いるのであとほかには４人。しかも、西校舎との渡り廊下に１人ずついるから見回りは２人。・・・意外としょぼいな。もっと大袈裟な人数にすればよかったか？初期設定ミスったな？

今は２階には見張りのテロリストしかいない。こいつは簡単だ。そのテロリストの向こう側に、日向の顔がちらりと見えた。テロリストには気が付かれていない（それに気が付く真治はすごいな。日向も真治には気が付いていない）。

「日向の奴・・・もっと慎重にやれよ」

アックを３階に向かわせ。真治はそっとそのテロリストに忍び寄り、後ろから静かに眠らせる。声を取り忘れた。

「ま、いいか」

すぐさま、日向にメッセージを送った。日向がメッセージを読み、こっちを見てきたので手を振った。日向ももうじき西校舎の制圧が

できそうだな。そう思いながら、3階へと走った。
3階のテロリストは2人。1人はすでに深い眠りの中に落ちていて、教室の片隅で座らされていた。あんだけ椅子があるのに地べたに座らされているので、なんだか気の毒のようにも思える。まあ、息があるだけマシだろう。
もう一人もアックがやっつけている最中だった。もはや、声は必要ない。静寂の中、まるで誰も入ったことのないような、深い・・・深い森の中のような静けさが校内を支配する。
思わず真治はアックの視界を接続した。コネクション（あえて）。メガネに映し出されたのは、すでにアックの胸の中で苦辛の表情をしている男。それも次第に消え失せ、男は赤ちゃんが眠るような涼しい表情になっていった。
「死んでないよな？」
そう思えるほど安らかな顔で目を瞑るテロリスト。微かに呼吸をしているのか体が動いている。ほっとしたが、その微妙な体の揺れも、アックがそう見えるように演出しているだけに思える。本当に殺してないよな？
俺たち特殊警察課とはいえ、もちろん、死刑執行の権利なんか持たされていない。する能力、出来る能力はあるが、あるからこそ、殺してはいけないのだ。誰が、何を持って（法だが）人の生殺与奪を行えるのか？それがしたければ、もとより、違う道を歩んでいる。
真治はアックと合流し、4階へと進んだ。
もうすでに、テロリストたちはここにしかいない。正真正銘ここだけだ（時間的にはまだ西校舎に日向がこれから倒すであろうテロリストが1人残っているが）。
「さて、クラスに固まっている奴らは最後だとして・・・あの見張りの奴はどうしようかな？」
見張り一人ぐらい今さらな感じもするが、その見張りは用人の娘がいるクラスを跨いでいかなければ捕らえられないのだ。見つかる可能性が高い。忍び足で娘のクラスの前まで行くと、やはり、難易

度は高い。
　万が一、見つかりでもしたら、人質になっているクラスの誰かが確実に殺される。一人で乗り込んでも何とかなりそうだが一人でも死傷者が出たらアウトだ。そんなことでは、特殊警察課の存在意義がない。
「そ・・・そうだ」
　徐に、1階で奴らの仲間から奪い取った無線機を繋いだ。ボス（おそらく）が一瞬繋がった無線機に反応し、何もしゃべろうとしない無線機に不振がる。
「おい、何かあったのか？」
「い・・・いえ、間違えてスイッチ押しちゃいました」
　この時すでに、4階の渡り廊下を見張っている男は悶絶していた。真治は無線機片手に、それでも手際よくその男をがんじがらめにしていった。そしてすぐさま、娘がいるクラスのすぐ隣のクラスに立て籠もり、待った。
　見張りを倒した時点で、隆起、日向にはそのことは伝わっている。それぞれ、自分の役割が終了次第、正面校舎の4階に集まることになっているのだ。
　隆起はもう終わっていたが、少し距離があるので合流には少しだけ時間がかかる。日向は真隣りなので、もうここに着いている。
「あとは佐藤だけですね」
　日向とバディーは真治の隣に座り、見えないのに隣のクラスをまるで透視でもしているかのように見ようとしている。
「もう直来るだろ。・・・あ、今アックから連絡が入ったが、佐藤もマイセルフも合流したそうだぞ」
　全員揃ったところで、あとは簡単だ。真治は再び、ニヤッと笑う。

テロリスト編終了（前書き）

テロリスト編が終わります＾ｍ＾

テロリスト編終了

高田が得意げな顔で3人を出迎える。3人ともに、やれやれだぜと言わんばかりに大きくため息をついた。ただ、それは高田に対しての思いだけではない。あの緊張・・・その他もろもろ、3人が3人ともに疲れ切っていた。

「どうしたどうした？何疲れた顔してるんだよ、お前ら？」

高田が高笑いをする。気持ちは分かる。分かるよ。でも、俺たちは疲れているんだよ。と、言わんばかりに高田を睨み付けた。でももう、そんなことすらめんどくさく感じるほどに、3人は休みたかった。隆起が地べたに座る。

「終わりました・・・ね」

日向も地べたに座り込み、何も持っていない空の手を持ち上げて、「かんぱ～い」と言った。言ってから少し照れくさそうに後悔した。それでも、やっぱりうれしさのほうが勝っていたようで、日向に合わせて隆起が手を持ち上げたのを見ると、こつんと、その拳だけを合わせた。

「俺たち、役に立った・・・よな？俺たちはみんな、頑張った・・・よな？」

調子には乗っているような素振りをしていたが、その声と唇、隆起と合わせた拳、呼吸をする体、波打つ心臓、胸を叩き付ける心臓・・・その日向という人間、形を形成しているものすべてが、小刻みに震えていた。隠しているつもりだろうが、みんなにバレバレだったが、隆起も全く同じに震えていたので、何も言わなかった。

「役に立ったもなにも、俺たちが事件を解決したんだぜ。いつまでも震えてないで、自信持てよ。日向。それに佐藤も」

真治も2人の拳に自分の拳をぶつけた。さり気なく「乾杯」と言った後、その手を自分の口に持って行った。

「ぷはー。仕事した後でのこの一杯。このためだけのために仕事っ

てのは存在してるんだねー。存在しているんだねー」
見透かしたようにやらしい目つきで日向と隆起の肩に手を回す。
さすがに真治は震えていない。むしろ、歓喜で震えているみたいだ。どことなく、本当に酔っぱらっているようだ。
「おいおい、俺も混ぜてくれよ」
と、空気の読めない高田がニンマリした笑顔で3人に寄ってきた。日向は少し、うんざりした顔を見せたが、真治と隆起はそれでもこの空気の全く読まない男を受け入れた。日向も、しょうがねーなー。と、この祝杯にケチをつけるのもどうかと思い（空気を読んで）、4人は拳を合わせて、「乾杯」と各々口にした（見えないお酒も一気に飲み干した）。
そのあと、高田は一人で機動隊のところに出向き、なにやら、歓迎されていた。高田も鼻が高いことだろう。初めはこの特殊警察課は機動隊以下だと言われ、しかも、機動隊以上だとも証明できず（そこはおかしな話だが）、日向たちには（特に日向）馬鹿にされ、事が済むまで何もできずに、ただただ、事の顛末が分かるのを待っていたのだ。
終わるまで、高田は半泣きだった。物笑いの種になるのか、それどころか、特殊警察課の存在すらも怪しかった。失敗などすればの話だけれど、成功する自信も・・・五分。真治が言った言葉、「日向や佐藤は初めての任務になるのですよ。大丈夫ですかね？」と言ったこと。一番気にしていたのは、実は高田だ（当然、真治はそれを意識して言っていた。ニヤリ）。
「じゃあ、帰るか」
真治はそう言うが、驚いたのは日向と隆起の2人だ。
「えっ？帰ってもいいんですか？」
2人は口をそろえて言った。真治は当たり前じゃんとだけ言うと、そそくさと着替え始めた（一応着替えのブースみたいなところを高田が用意してくれていた。それすらもやってくれていなかったら、高田は完全に無能だ）。ブースから出てきた真治は、警察官の格好

に戻っている。真治が2人の顔を一瞥すると、やはり意地悪くニンマリと笑った。
「早く戻らないと、マジでクビになっちまうぞ」
そうなのだ。それが特殊警察課なのだ。誰にも気づかれず（とは言い難いが）、誰からも気が付かれない（若干高田が目立っているが、特別公には出てこない）。日向も隆起も慌てて着替えて、そそくさと、出来るだけ素早く元の職場に戻って行った。それが特殊警察課なのだ。
このまま終わると、そういえばテロリスト云々はどうなったんだと思われるかもしれないので（気にしている人がいることを祈りつつ）、あの場で何が起こったのかだけは、事の顛末は話しておこう。
隆起とマイセルフが正面校舎の4階、用人の娘が人質に取られているクラスの隣のクラスにたどり着いた。が、事はすでに限界に達していた。真治がここの4階の見張りを倒すのに、テロリストのボスに連絡をしてしまっていたからだ。テロリストにとっては不用意な連絡だった。
「時間があまりないが、なんかいい案あるか？」
真治が来たばかりの隆起に尋ねてきた。もちろんそれは言葉ではない。真治と隆起は別々のクラスにいる（娘のクラスを挟んで隣どうしに）。隆起たちが来たクラスには真治のマイセルフ『アック』が代わりにいるのだ。マイセルフ同士は何も使わずに連絡でき、その連絡もメガネを通して持ち主たちにもできるのだ。
日向には何故、支給された携帯から連絡したのかと思うかもしれないが、マイセルフ同士だと全員に連絡してしまうので、近くに全員居る時はそれをしてもいいが、逆に場所が分からないときなどは控えた方がいいのだ（説明長！！）。邪魔をしてしまう場合があり、それは互いの任務失敗と、命取りになる可能性を増してしまうのだ（ハイリスクノーリターン）。
それはそうと、さっきの真治の質問。今来たばかりの隆起にそんなプランがあるはずもないが、そんなことを言っている場合ではな

い。日向も考えてはいるが、それがいい案かどうかの自信はない。
そんなことより、真治のプランを2人は聞きたかった。ぜひとも、聞きたかった。
「し・・・真治さんはどうですか？なんかプランはありますか？」
と、聞くと全員に真治の考えるそれが送られた。
再び、テロリストのボスに無線が入る。少し乱暴に声を荒げるボス。周りの部下と人質が、迷惑そうに横目でボスのことを見る。人質はともかくとして、部下にそんな目をさせるなよ。
「今度はなんなんだ？」
しつこい無線に、せっかく作った緊張感も台無しだ。ボスの怒りはそこだ。計画の邪魔になるから、という理由で部下の勝手に怒っている。という訳ではなかった。今この、ドラマティックな展開に、水を差されることにイラついているのだ。まるで、主人公にでもなったつもりだ。
「えーと、ボスに伝えとかなければならないことがありまして・・・」
無線からはえらく畏まった言い方で、部下からの声が聞こえてきた。・・・普通ですよ。ボスなんでしょ？普通は部下から連絡が入るときは、畏まった物言いするでしょ！？
「だから、緊急の回線を使ってまで言うことはなんなんだと聞いているんだ！」
まるで、本当のボス気取り（正真正銘ボスですが）。周りの部下たちも、その様子に聞こえないため息をついた。なぜ、そこまで尊敬も慕われもしていないのかというと、それはしょうがない。
「それはな・・・」
若干、無線からの声色が変わった。しかし、ボスはそのことに気が付いていない。気が付いていても、もはや手遅れ。どうすることもできなかっただろう。
「それは？」
ボスが素直に聞き返す。かなり今の物言いは失礼だと思うが、気

が付いていない。気が付いて、ボス！！

「俺が本当の主人公なんだよ！！！」

無線機から召喚されたのは鼓膜が破れそうなほどのでかい声。もちろんその声の主は佐藤隆起（さとうりゅうき）だ。あまりに目立たないのでここで主張しておいた。その隆起は今どこにいるのかというと、すでに用人の娘のクラスの中にいた。ボスと、目が合っている。隆起も日向も真治も・・・みんなクラスの中に入っていた。マイセルフたちは外に待機させて。

「（出来るだけ）伏せろ！！！」

真治が叫んだ。もちろんそれは人質になった高校生徒たちにだ。生徒たちが反射的にしゃがむのを確認した時、この場で６人の男（？）たちが同時に動いた。

外に待機していたマイセルフたちが一斉に飛び込んだ。人質に取られた、その中でも特に、テロリストに直接拘束されている生徒たちの無事の確保を優先させた。反動を少なく、それでいて確実に生徒とテロリストを引きはがした。まずは２人。

真治と日向が共同でもう一人の生徒を助けつつ、一人のテロリストをまず、取り押さえた。

「へい」

隆起がハンドガンを構えた。やっと（本当にやっとガンアクションの一角が見えた）だ。隆起は後ろにいる２人の（マイセルフとアックが突き放した）テロリストを素早く撃ちぬいた。スポスポ・・・と乾いた音が聞こえたと思うと、その銃口を向けられたテロリストたちはほぼ同時に吹き飛んだ。もちろん、後ろにね。撃ち抜かれたのは肩だ。

特殊警察課に支給されるハンドガンは特注品の特注品。要はめちゃくちゃ弱い。ほとんど密着させても貫通しない程度の威力。でも痛い。怪我はする。こう見えて、隆起の銃の腕前は（こんな言い方は嫌いだが）神レベルだ。弾以下でなければ枠を通すことができる（ただし、距離１０メートル以内）。

ボスが慌てた。ものすごく慌てていた。そもそもここに自分たち以外の人間がいること自体が不思議でならなかった。あわわあわわしているうちに、仲間がどんどん（ほぼ同意にだけど）やられていく。どこを狙えばいいのやら？手には立派なポンプ式ショットガンを大事そうに握っている。適当にぶっ放せば何かに当たるし、何に当たってとしても隆起たちに任務失敗と一生の後悔を植え付けられたというのに。この後すぐに、本当にあわわあわわ言うことにはなるが。

「あわわわわ（ちょっと違った）」

ボスの足元に、日向の『バディー』がいた。バディーはボスからショットガンを奪い取ると、股間を思いっきりひっぱたいた。隆起が痛そうに顔を歪めた。バディーは１４０ｃｍと小柄だ。ボスも周りの女子高生とあまり変わらない身長で、隆起にも（出来るが）銃撃するのが難しかった。安全性を求めたら、デカいアックなどに注意が言っている隙に、バディーが動くのが一番適切だった。

「よし。高田さんに連絡だ」

これが事の顛末。隆起は大きく息をついた。ため息にも似た、だが、ため息とは似て非なる、自信に満ち溢れた呼吸だった。

テロリスト編終了（後書き）

次から新章に入ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5405t/

マイ　マイセルフ　－僕のマイセルフ－

2011年6月8日01時25分発行